

山下智恵子

砂色の小さい蛇

# 砂色の小さい蛇

発行——一九七八年七月十五日　初版

著　者——山下智恵子

発行所——BOC出版部

東京都新宿区新宿一―九一六

電話・東京（〇三）三五四―三九四一

振替・東京三―三九三三一

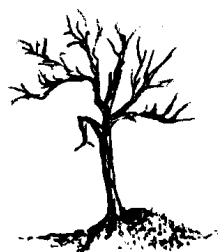
印刷所——前田印刷株式会社

製本所——今井製本有限会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

# 砂色の小さい蛇

山下智恵子





# 目 次

犬……………9

メデューサの首……………43

走って飛んだ……………75

掌の息……………147

逃げ水

.....

179

砂色の小さい蛇

.....

205

墓標の海

.....

235

埋める

.....

271

装丁 山下桐子

# 砂色の小さい蛇



犬

犬が死んでいた。首をそらしぎみにし、四肢をなげだしている。細く開いた口から、ねばねばした液がたれ、土の上にしみこんで黄色いしみをつくっていた。

昨夜、洗濯ものを干しにきた時には、どこにも犬の姿は見えなかった。夜中か朝ここにきて、死んだのだろうか。朝陽が、犬の赤茶色の毛あしをてらしている。ほこりをふくんだ硬そうな毛。加那は犬のそばにしゃがみこんだ。半開きの口から、白い鋭った歯が見える。その上にまくれあがった唇が、黒いびらびらしたゴムのようだ。後肢にそって、尾が力なくたれてゐる。二、三日前に、加那が置いたままの位置に、いちごが入っていたビニールの容器があった。水はまだ半分ほど残っている。

加那はビニールの容器をひきよせ、指先で水をすくうと、犬の口もとにこぼした。水はぎざぎざのあるゴム布のような犬の唇をすべり、歯をぬらして、土の上にしみこんだ。

板塀のむこう側から、洗濯機のまわる低い機械音にからまって、子どもを叱る女の声がひびいてくる。加那は塀の下からはみだすようにして咲いているゆきのしたの白い花を手折った。織毛のはえたえび茶の長い茎に、白いはなびらが八の字型に並んでついている。蝶が羽をやすめているようだ。二本折りとなると、犬の頭の脇に置いた。それから、犬のからだをまたいで、ロープに干しておいたわずかな洗濯ものをとりいれた。

部屋にもどると、押入を一ぱいに開けた。カビくさかった。二段に仕切られた押入れの下段には、プラスチックの収納箱や、使い古したハンドバックなどがごたごたと入っている。上段には薄い布団や、カバーのはずれかけた座ぶとんといっしょに、雑誌や洗濯もの、ハンガーに通したままの衣類などが、乱雑な山になっている。アキ子はもう四日も帰って来ない。黙って押入れの中をさばくのは気がひけたが、加那はやっぱり衣類の山に手をつっこんだ。捨ててもいいようなボロ布を見つけたかった。

洗濯ずみらしい下着類にまじって、衿もとがうすく黄ばんだガーゼの寝巻が、ずりおちてきた。ひろいあげると、寝巻に男ものの下ばきがからまっている。体臭がにおってきそうなそれらのものを、加那はあわててまるめると、押入れに投げこみ、戸をしめた。

ソファベットの敷きっぱなしになった夜具を見た。アキ子にうちへおいでよ、と誘われるま

まに、喫茶店の二階から移ってきて、泊まるようになった加那である。さっきまで寝ていた化繊のべかべかした洋ぶとんをはぐ。体臭が小さな風といっしょにまいあがる。よじれたシーツが半分、畳にたれさがっている。加那はシーツをたぐりよせた。あとで、新しいのを買ってかえしておけばいい。使い古したシーツは、足のあたる部分がすりきれ、ガーゼのように織目がすけてみえる。

裏庭に出ると、犬は静かに加那を待っていた。犬の口もとに、青びかりのする大きなはえが一匹とまっている。シーツを地面に置き、犬のからだを抱いた。こわばった重さが、腕に感じられた。褐色の毛からは、ひなたくさいにおいがたちのぼったが、土にふれていた部分は冷たかった。加那は折紙を折るように、シーツの端を持って、犬のからだを覆っていった。はやくもしおれて花びらがよじれているゆきのしたを二本、犬といっしょにくるみこんだ。

食パンを二枚、トースターに入れたが食欲はなかった。一枚をビニール袋にもどす。寝るまえにカップラーメンを食べたのが、よくなかった。口の中が苦くねばっている。喫茶店へ出る時間だった。紙パックの牛乳を、コップに半分注いで飲んだ。あれをどうしたらいいのだろう。加那はシーツに白くくるまったもののことを思った。シーツの折目をひだのあいだに畳みこんで、風がほどいてしまわないように、小さな石をのせてきた。あまり大きな石では、犬が重い

だろうと思つた。

トースターのスイッチが切れる音がし、パンがこうばしいにおいをさせて、ゆるゆるとのぼつてきた。二つならんだ横長の穴のまわりにパン屑がこぼれおち、埃がこびりついたトースターを、加那はしんと静まつた目で見た。犬は飢死したのだろうか。

アキ子の借りているこの家へ来て二、三日目に、加那は裏庭で犬を見た。板塀の破れからでも入ってきたのか、台所の戸口の横に、犬はいた。赤茶色の毛の、かなり大きな犬だった。後肢の一本だけが、ソックスをはいたようにつま先まで白かった。首輪も鎖もなかった。犬は加那と視線があうと、迷うように一瞬目をそらし、三角の耳を少し横へねせるようにした。尾を足のあいだにはさみこみ、いつでも横つとびに逃げだせる姿勢をとった。加那が紙屑かごを持つたままじつと見ていると、犬はさげた尾の先を、ほんの少し振ってみせた。

カップラーメンのふやけた残りや、パンの耳を台所の戸口の脇に置くと、犬は耳を横にねかせ、低い位置で遠慮がちに尾を振った。いつまでたつても、加那が見ている前では食べようとはせず、加那が意地悪く立ちつづけると、焦れて足ぶみするように前肢を動かし、情なさそううな表情で上目づかいにこちらを見やった。加那が戸口に消えるふりをする、待ちかねたように食べものに首をつっこむ。がつがつと大あわてに餌をのみ下す時、細いすじばった後肢が

ぶるぶると震えていた。

ある早あがりの日であった。沈みあぐねた太陽が、斜めに辻を照らし、道をゆく人の衿首を燈色に染めていた。中華料理店の裏口から、いきなり褐色のものがとびだし、加那の足にぶつかりそうになった。すぐあとから、しみだらけの白い上衣を着た男が、火挟みをふりあげて出てきた。加那はあかあかと照らされた街なかを、斜めにつきつて走る獣の背を見た。犬の名を呼ぼうとし、言葉がつまった。犬には名前がなかった。犬はなにかをくわえていた。いつもの動きの鈍い、はじめなようすの犬からは、想像もできぬような敏捷な身のこなしであった。加那はほっとした。犬に心がよりそのを感じた。お前、と加那は心に呼んでみた。どこからでも盗むがいい。生きられるだけ生きるがいい。獣の背が燃えあがるように輝き、逆光の中に見えるなくなったあとも、加那はしばらく立っていた。

店へ出ると、マスターが不機嫌な声でいった。

「今日はアキ子のやつ、出てくるのだろうか」

加那には答えられない。どこに泊まっているのか、加那も知らないのだ。加那が店に出ているあいだに、アキ子は、あの家に戻って、着替えぐらいは持って出ているかも知れない。昨日は店も無断欠勤した。加那はあいまいな声で、ええ、と答える。

テーブルの上にのせた椅子を一つ一つおろし、ダスターでふく。シートのビニールレザーがひとところ、かみそりで切ったような傷を見せて裂けている。昨日は破れてなかったはずなのに。加那は黙って次の椅子を、テーブルからおろした。今報告すれば、となりつけられるのは加那だ。

お得意の会社名ごとに、コーヒー券がべたべた貼られたレジスターの奥の壁を、加那は意味もなく見つめた。

「犬の死骸？ そんなもの保健所へ電話一本すりゃあそれでスミさ」

たばこに火をつけながら、セールスマンがいう。

「トラックに積んで持ってってくれるよ」

「野良犬なんだろ」

マスターが、テレビの番組表に顔を近づけながら口をはさむ。

「そう。だけど知っている犬だもの」